

薩摩焼の名窯・作家の紹介

世界を驚嘆させた名窯・作家たち

成瀬誠志 [1845-1923年、名：和六]

1845年に岐阜県中津川市に生まれ、1858年に地元の茄子川焼の篠原利兵衛の徒弟となります。1871年に上京し、芝区・増上寺に工房を構え陶画工となり、薩摩焼風陶器の絵付けを始めました。当時、幕末から欧米で好まれたジャポニスムの流行を受けて作陶した成瀬の細密精緻な「東京薩摩（江戸薩摩）」の評判を聞いて外国人が来店すると黙って、「拡大鏡」を渡したと言われています。その細密画は瞬く間に海外でも評判になり、注文が殺到したようです。1つ1つが手描作業のため制作数が少なく、眼にする機会は非常に稀です。1877年に開催された第1回内国勸業博覧会での受賞を皮切りに、国内外の博覧会で入賞するなど高い評価を受けました。米国の動物学者で日本陶磁収集家“エドワード・モース”から「薩摩焼風陶器の細密画の元祖」と紹介されています。

1884年に日光を訪問した際に東照宮の陽明門の素晴らしさに感動し、陶器で作ることを決意しました。1886年、より本格的な制作の場を求め帰郷し、工房「陶博園」を作りました。そこで、3年の歳月をかけて「日光東照宮の陽明門」を完成させました。この作品は1893年に米国・シカゴ万博に出品した際に輸送中の事故で破損し、その一部を展示したところ多くの賛辞を得て「工芸一等賞」を受賞しました。

川崎富山 [1875-1922年]

「龍雲富山」銘は川崎富山と考えられている。銘では「富」だが、号としては「富」が用いられている。京都栗田鍛冶町に店舗と絵付場を設立して輸出用の薩摩焼（京薩摩）を製造していました。神戸にも出張所を設立し、錦光山、安田、楠部に次いで4番目に大きな規模で輸出陶磁器の製造を行っていた。明治末期の輸出不振の際には友禅の絵描きに転身するものもいたと伝わっています。